

明治期の東京における武道文化の伝承について ～浅山一伝流・兼相流を切り口に～

南京大学歴史学院博士課程 青山 英明

(要旨)

本稿は明治期の東京における武道再編の構造と伝統文化の変容過程を可視化し、近代日本における「断絶と継承」の構図を再考したものである。古流武道とされる流派の技法の実態は、明治期にその原型が失われ、新式柔術に古流の名を仮託して伝承されていたことを確認した。また伝書に見られる禅への取り組みから、武道は明治期以前から、単なる技芸でなく精神修養を伴う文化体系であったことを再提起した。

キーワード：水戸藩、浅山一伝流、兼相流、武家文化、禅、歴史人類学

(英文要旨)

This study employs a methodology combining densho (traditional scrolls) comparison, statistical analysis, and oral history to visualize the structure of martial arts reorganization and the transformation of traditional culture in Meiji-era Tokyo, thereby reconsidering the framework of “discontinuity and succession” in modern Japan. It was confirmed that the actual techniques claimed to be ancient traditions (kuden) had lost their original forms during the Meiji period, and were instead transmitted as “new-style jujutsu” under the guise of classical schools (koryu). Furthermore, by examining the engagement with Zen found in the scrolls, this study demonstrates that martial arts were not merely technical arts but a cultural system involving spiritual cultivation.

はじめに

本稿は、明治維新後の社会変動の中で、江戸期に館林藩士が東京に伝えた総合武道、浅山一伝流が東京においてどのように伝播し・変容したかを実証的に明らかにすることで、江戸期から明治期への社会体制の変革が日本伝統文化の一角である武道の伝承に与えた影響を分析し、伝統武道の近代変容のパターンを抽出、観測することを目的としている。日本全国に現存する浅山一伝流関連の伝書を通読し、各地の伝書に記載された技名を抽出、集計し、共通項目を可視化し、流派の伝承体系を把握した上で、東京で伝承する関係筋を比較した。

1. 研究の意義

明治維新という時代の転換期における伝統武道の「断絶と継承」の実態を解明することで、武道文化研究に新たな視点を提供する試みをしている。具体的には、武道伝承の付会ないし「仮託」現象の実証、近代武道の成立過程の解明、武道と禅宗の文化的関連性の提示などの角度から調査分析を実施した。

結果、明治期の東京における浅山一伝流は、江戸期の原型に近い形では存在せず、為我流をベースとした新式柔術が原型となったものが「浅山一伝流」の名称を仮託して伝わっていた可能性が高いことを明らかにした。これは、近代化の過程における伝統文化の変容のメカニズムを理解する上で価値ある検証であると思われる。また調査中に発見した兼相流

の伝承から同流は「明治期の総合武術」として、無比流杖術、為我流和術、浅山一伝流剣術など複数の古伝技術を取捨選択して形成されたことを実証し、いわゆる新式武道の多元的な成り立ちを具体的に示した。このほか調査した史料から浅山一伝流の印可目録や道歌に、禅宗（特に雲門宗の「三句」）の影響が散見されることを取り上げた。武道が単なる技芸ではなく、明治期以前からすでに心性鍛錬を含む文化体系があったことを再確認できた。そして本稿が用いた調査方法（伝書比較・統計分析・オーラルヒストリー補完）は汎用性があり、現存する他流派の伝承実態を検証するための参照物を提供したと言える。

2, 研究対象

研究対象は東京に伝わる大倉伝浅山一伝流体術と、同流と密に関連する兼相流である。

本来、浅山一伝流は剣、柔を中心に棒、手裏剣などを総合した流派であり¹、古くは上州碓氷の郷土、丸目主水正則吉を遠祖とし、国家弥左衛門を経て浅山一伝斎重晨に伝え、一伝斎を中興の祖として²諸国に広まったとされる。異説では江戸初期に浅山一伝一存³と分流し嫡伝を受ける8代目、館林藩士の森戸家が家元制度を敷き、参勤交代で江戸詰になった地方の士に伝えたことで全国的な流派になったとされる⁴。分派としては浅山流のほか、柔を主体とする浅山一伝流體術、剣を主体とする浅山大成流と浅山一刀流などがある。うち東京に伝わる大倉伝では、旧会津藩士の息子、大倉直行が母親と、叔父にあたる田中タモツなる人物から体術、棒術を学ばれたとされ、田中タモツより先の伝承記録は失伝したという。

兼相流とは富田勢源（中条流）と上泉秀綱（新陰流）から学ばれた戸田清元が戸田流を起こされ、2代目清元の戸田越後守綱義（戸田流）の高弟、薄田隼人兼相⁵が兼相流柔術と無手流剣術を起こされたとしている⁶。しかし本稿で取り上げる兼相流は、上記伝承との関連性を示す証跡は見つかっておらず、むしろ為我流を母胎とし浅山一伝流をはじめ他流柔

術を研究した旧水戸藩士が創案した一流であるとされる⁷。

3, 研究方法

日本全国に現存する浅山一伝流と思しき伝書、また関連諸流の伝書を通読し、浅山一伝（傳）流と名を冠する各地の伝書に記された技名を抽出・統計し、共通項目を可視化した。うち体術の共通項目と、東京に伝わる大倉伝浅山一伝流體術及び同流派の流れを汲むとされる兼相流柔術の術名の相似を比較した。

4, 今後の発見

4-1), 為我流伝書にみられる渡来人とのかかわり

兼相流の源流のひとつ、為我流の秘伝書では、薬法と呪禁法が伝わっており、両法のおおもとは中国の漢王朝時代で登場した仙人・黄石公とされている。以降4代目に漢の名将・韓信が名を連ね、5代目からようやく日本人が登場する。史実では黄石公の弟子は張良子房の1名で韓信が日本人を弟子とした記録はないが、広義的には渡来人が伝承の秘奥に密にかかわった可能性を示唆したと言えよう⁸。

4-2), 一伝流系統における渡来人由来説

従前では浅山一伝流に代表される、一伝流系統の始祖は浅山一伝斎重晨であり、起源は師が霊夢により秘儀を開眼したとある⁹。しかし大倉氏が発行した伝書¹⁰では開口一番に「～その始まりは慶長の頃に渡来した中国人に拳法を学び、その後取捨選択をしてさらに相撲の技を加えたものであり拳術や和術と名付けたが現在では柔術と呼ばれている」と言明している。慶長年間（1596年）から1615年まで使われた、安土桃山時代から江戸初期にかけての年号である。

浅山師は天正年間（1573～1592年）のお生まれであるから、年次的に幼少の頃より渡来人から拳法を学んだとすれば奇異はない。浅山不動尊¹¹は正面の独鈷の滝とは対の関係で慶長19年（1614）には当時の領主別所吉治が娘の眼病平癒の祈願により

護摩堂を建立したとあり、師はベースとなる大陸伝来の武術等を学んだあと参籠したと考えるのがより妥当と言えよう。

4-3), 兼相流柔術と浅山一伝流體術東京伝の密接な関連性

江戸期以前より伝わる浅山一伝流とされる種々の伝書に記録される技名と、明治期に東京の白山御殿町に伝わったとされる浅山一伝流體術13代宗家・大倉直行源知徳が弟子に宛てた伝書にある技名を比較した時、相似比率はわずか3,4手に過ぎなかったのに対し、兼相流柔術との技名の相似比率が5割にのぼり¹²、兼相流の基本三十六手と中伝十二手、居捕六手すなわち6割程度の技を、まったく同じ教伝手順と技名を以て継承している。当該事象から、明治期に東京で伝えられた「浅山一伝流」の成り立ちには、可能性として：

- ①兼相流の一部を学ばれた大倉氏が創意工夫の上、兼相流の複数ある源流にあたる古流武道流派のうち、最も歴史ある流儀を名乗り、仮託した
 - ②兼相流が形成する過程で大倉氏が断片的に伝わった浅山一伝流の技を提供し、兼相師と共に研鑽、形成にくみしたのち独自の解釈を加えたもの
 - ③大倉氏が家伝の柔術を独自に大成させる過程に於いて浅山一伝流の技名を家伝武術から発見し、浅山一伝流體術として伝えたもの
- などが考えられる。

①について。大倉氏が兼相流を学んだ史料は現在確認できていない。しかし伝習する技名の重複度合いから、兼相流は大倉伝浅山一伝流體術に決定的な影響を与えているか、与えられているかと論断しても過ぎないと思われる。

では兼相流の成り立ちはどうか。兼相師の初期の弟子であり、大正～昭和10年にかけて師に学ばれたのちに印可し、無比流13世と名乗った清水謙一郎重明師と、兼相師晩年の弟子であり、昭和18年に印可し無比流13世、浅山一伝流23世と名乗った松本貢兼久師の、両師範の手記や口伝を頼りに兼相流の成り立ちを確認しておきたい。

清水師の手記によれば師は独立後、兼相師が掲げた屋号のひとつ「日東武術研究会」に因んで東京都板橋区上板橋6丁目4-9-35で「日東武術研究所」を開設し、併設した道場の名を「常心館」とした。師は昭和28年に内部資料として「拳双流逆手柔術」¹³を、後に「兼相流柔術上下」¹⁴、「常心館柔術」¹⁵を書かれたという。師は兼相流柔術の成り立ちについて同著の複数箇所で見及している。まず表紙に開口一番「武石派為我流柔術二代目 清水重明 講述」¹⁶と明らかにしており、裏表紙に「無比流第13世 清水謙一郎著 拳双流 逆手柔術」¹⁷としている。即ち清水師の認識では兼相師から相伝した武術は「無比流杖術」と「武石派為我流」であり、両者が混然一体となったモノが「拳双流逆手柔術」である。兼相と拳双は同音異字であり、師の号への気遣い＝避諱が見て取れる。当該事象から、清水師の教養をうかがうことができる。

同著には兼相流についてはつぶさに記録されている。曰く兼相流は「茨城県出身、兼相武石謙太郎先生の創始に係る逆手柔術である。先生は元水戸に伝わる為我流柔術に精進せられ其の蘊奥を極められたが、同柔術が餘りに形式的で廻りくどいものであるのを慨し、専ら実地実用に使用する目的の下にこれに工夫をなし、加うるに柔術諸流中の『効く手』を交えて一種の柔術を編出し、之を兼相流柔術と名付けた」¹⁸とある。

現在、兼相師が為我流の印可もしくは師範である史料は確認できていない。清水師の論著と総合すると、郷里で無比流と為我流を学ばれた兼相師が、柔術に関しては為我流を骨子に複数流派から逆手技と当身技を取捨選択し、最終的に我の流派を形成したと見て取れる。術の完成と道場の設立は明治41年とされる¹⁹。

では松本師の手記はどうか。松本師の追憶によれば「兼相先生は茨城県水戸市勝田村²⁰の方で、明治四十一年より日暮里にて道場を開き、次に蒲田駅の南側に道場を建てられた。(中略)昭和二十年に道場開散、平塚市にて松道流松武館として兼相流を受け継いでいる(中略)。兼相師の一番尊敬して居られた方は無比流十世小松崎兵庫業求師だった²¹。(後

略)」との手記を残している²²。しかし、浅山一伝流に関しては可視化された記録はない。口伝では「松本師が稽古しているところに、兼相師が『継承者のいない知人がいるから、行って流派を継承してきてはどうか』と言い、出向かせたが、先方はまったく同じカタをやっていたため、ほどなく兼相師のもとに帰ってきた。その時の出稽古先の先生が浅山一伝流と名乗っていたため、浅山のカタとワザを兼相師は持ってらしたとわかった」ようである²³。

兼相師の壮年期の高弟である清水師と、晩年の弟子である松本師の手記を総合すると、兼相流とは、水戸藩に伝わる無比流杖術²⁴、為我流和術を学ばれ、明治期の時流に合わせて取捨選択を繰り返し、古伝の複数流派から技を抽出、特化したいわば「明治期の総合武術」であり、武石謙太郎兼相が創始者であるとみてはば、間違いはなさそうである。浅山一伝流に関する伝承は、清水師の記録になく、松本師の口伝にあったということは、少なくとも兼相師が浅山一伝流を学ばれたのは初期の弟子である清水師が独立したあとではないだろうか。

兼相師の晩年の活動について、記録は残っている。昭和5年4月に郷里の有志が勝田尋常小学校「勝田青年同志会」を発起した際には午後の記念行事に「棒術師範」として出席、棒術の型を演武され、錦上に華を添えたとされる（兼相師の演武ののち、現地青年が「為我流柔術」の型を行われたとある）。勝武館の解散は松本師の回顧によると昭和18年頃であるから、昭和5年は兼相師が晩年に差し掛かる時期であると推測される。兼相師が生前「棒術の師範」として、社会的に認知されたようである²⁵から、兼相流の柔術も、浅山一伝流の諸術も客観的には「傍系、併伝」扱いと断じざるを得ない。また巷説では兼相師が伝える浅山一伝流は「山崎房吉の後、武石兼相が承伝したが（中略）かなりの形が失伝した様子である。大倉直系柔術と合併して、現在神奈川県を中心に稽古が続けられている」²⁶との先入観が一般的に広まったものの、今般の考察から兼相師と浅山一伝流とのつながりは比較的に浅く、そもそも体系的に習っていない可能性が残る。むしろ後年、兼相流柔術を学んだ大倉氏が「浅山一伝流」の

名に付加価値を見出し、仮託して名乗ったのではと推察される。

付け加えて言うと常心館は無比流杖術、兼相流柔術を相伝し清水師ご自身が警察勤務だった経験を加え常心館柔術、半棒術へと昇華された。師の内部資料に常心館柔術と兼相流柔術の違いについて記述され曰く「常心館柔術は兼相流柔術を修行して而してその後に於て出来たもので、敵に対して技を掛けるに当りなるべく力を使用することなく之を制御することを目的とする方法である」²⁷、また後半に常心館柔術基本形7本²⁸を収録、ベースとなる兼相流柔術の技名も残している。

②について。街聞では「明治末期に大倉氏が東京都文京区小石川か、白山御殿町に『武徳館』なる道場を開設し昭和10年代まで活動した」とする説がある。明治期に関する建築学的な年次区分は一般的に1868～1882年（明治元～15）を前期、1883～1897年（明治16～30）を中期、1898～1912年（明治31～45年）を後期と区分しているようである²⁹。1912年の地籍台帳は現存しているが、武徳館なる道場の存在は確認できなかった³⁰。また同区担当者に確認したが、やはり「武徳館」の存在記録はみあたらず、オーラルヒストリーも確認できていないという³¹。一方で、兼相師の住所兼道場は北豊島郡日暮里村千四百五十六にあることが確認された³²。

清水師の手記³³によれば兼相師は「明治41年に道場を設けられた」とあり、概ね松本師の回顧録³⁴と一致する。また兼相師は三越の弓道部に所属しており³⁵、巷説の「東京に出て三越で働いた」と整合性が取れる。

上記から、兼相師、大倉氏がともに研鑽した仮説は立証できない。

③について。大倉氏は叔父にあたる田中タモツ氏から学んだとも、実母から学んだともされるが、実際の伝承は定かではない。高弟の一人・坂井宇一郎氏の実子である坂井英二氏が雑誌でインタビューに応じた記事を見つけ、同誌編集部を通して2023年4月に面談を申し込む手紙をお送りしたが、本稿が結稿した2025年10月時点では、返信は得られていない。さらなる調査と論証が待たれるが、現時点で公

けの史料の中で伝承を立証できるものは見つからない。

複数の可能性を総じて考えると、東京に伝わる大倉伝浅山一伝流も、兼相流も浅山一伝流とのつながりは深いとは言えず、むしろ名を付会／仮託したと推察するにいたる。

東京に伝わる大倉伝浅山一伝流は、その後、数多なる現存流派や古流と名乗る流派に影響を与えたとされる。しかしもし東京の浅山一伝流は兼相流をベースに創作されたものであるとすれば、明治期の新式柔術である兼相流こそ、現存する多数の武術の源流にあたり得ると同時に、江戸期のママの浅山一伝流は明治期の東京ですでに形骸化、ないし失伝した可能性が高い。

4-4), 武道の極意(心法)と禅の関連性

副次的な発見として、今般の調査で小田原に伝わる浅山流の目録には、稽古や禅修行のヒントとなる複数の公案や道歌があり、中には禅宗に通じるモノも見受けられた。同流の傍流にあたる流派で26年ほどを学び、浅山流の部分的な脈絡伝承をうける筆者は、秘奥の全文解明をするレベルに到達していない。しかし一伝流居合の印可目録には、現存する口伝に相通じるくだりがあり、文化的な付加価値を考慮して、一部とはいえここに明かしておきたい。

同目録によれば、「武器の種類は多くあれど、利剣に比肩するものはなく、利剣の術は優れていようと一心に勝るものはない」と説き、心の持ちようが肝要であるとし「性は心の體であり、心は性の用である」と、禅宗の公案解説めいた説明を綴っている。続く印可技には「水月」と「想暈」があり、うち水月は口伝として連綿たる流れを経て、筆者に伝わってきている。2本の技に共通する秘伝は三句あり「①随波逐浪、②函蓋乾坤、③衆流截断」である。水月の理は「随波逐浪」にあるとした³⁶。

同三つの句は禅宗5家のひとつ、雲門宗の接化の手段として用いたもので「雲門の三句」³⁷として知られている。随波逐浪は現実を厳しく見据えた上に、計らいなしで、あるがままの機峯を示すものである。

また印可に至らないレベルの修行者に経験を伝達する道歌も複数現存しており、禅の影響が散見される。一例をあげるとすれば「寒き夜の霜を聞べき心こそてきに逢うての価値はとるなれ」³⁸の句があり、相手と対峙した際の心の持ちようを説くものである。

今後の課題

今次の、統計と伝書比較を主として、オーラルヒストリーを補筆とする調査、考証では、江戸中期に隆盛した武術流派のひとつである浅山一伝流は明治期に於いてはすでに東京で創流時に近いカタチで存在しておらず、むしろ為我流をベースとした新式柔術に、浅山の技と心法が断片的に伝わり、新式柔術を浅山の名前でヤドカリした形で伝わったという、たいへん興味深い結果となった。同時代に勃興・隆盛し戦禍を逃れて武道として現存するモノはほかにも複数流派あり、当該流派群の技と古伝の記録と照らし合わせたとき、果たしてどの程度、伝わっているのか、検証する余地が残る。また文化的な側面で、身分制が廃止された明治期において、旧武士階級が糊口のために武道を農民や商人に授けたのか、それとも同一信仰を通じて、寺という集積地を経て普及していったのか、精査する価値はあると思われる。

内容の側面からも検証の余地が残る。浅山一伝流の道歌には、田宮流³⁹や山岸流⁴⁰などに通じるものが多数あり、どのように交流し相互影響をしたのかを明らかに出来れば、武士階級間の文化交流を垣間見ることもできそうだ。

一方で今次調査のポジティブな発見として、天下泰平の世では武士はますます心法に磨きをかけ、禅宗の行法を取り入れ、心性の鍛錬を最上としたことを確認できた。反面、江戸中期では日本の首都で一大勢力を誇った武道でも、明治期になると凋落をし、事実上消滅した可能性がある。一方で他流に残った遺技を学んだものが、古流と仮託して流派名と看板を使った疑義がみられた。これは浅山一伝流の一流一派に限ったことなのか、はたまた動乱期で噴出した社会現象なのか、今後調査を深めることとしたい。

結びに

無比流杖術師範の武石兼相師が為我流をはじめ、諸流の逆手と当身を集め、取捨選択して大成させた兼相流柔術を「拳双流逆手柔術」として伝える清水謙一郎重明師の常心館と、「松道流護身武道」として伝える松本貢兼久師の松武館のほか、今次の考察で新たに「浅山一伝流體術」として伝える大倉直行氏の武徳館が加わったとみても良さそうである。常心館はのちに望月庄一郎氏に伝わり「護身道」に変容した。松武館は無比流杖術、居合術、浅山一伝流剣術、兼相流柔術を相伝し、松道流へと収斂された。武徳館は高弟・坂井宇一郎、永沼経行や上野貴天心（天心古流）⁴¹に伝わり、上野氏の門下から佐藤

金兵衛（大和道）⁴²、初見良昭（武神館忍術）⁴³、姉川勝義（浅山一伝流體術）⁴⁴といった戦後日本武道史上に燦然たる実績を残す達人名人が生まれ、大いに栄えた。また海外での影響が大きく、佐藤金兵衛は中国拳法の大家・裴錫榮と私淑して、天心古流を伝えている。裴の晩年に中国語訳した内部資料図録が現存する⁴⁵。図録では源流の浅山一伝流について、やはり東京伝浅山一伝流體術どうよう、渡来人の技がベースにあるとしている。

今次の調査で明治期の東京における日本伝統武道の変化の過程をたどることで、近代国家による武道制度化以前またはそれと並行する民間伝承の場において、古流名義がどのように再編・附会されたかを示す手掛かりを得られたのではと思案する。

註

- 綿谷雪, 山田忠史 編 (1969年)『武芸流派大事典』新人物往来社 P15
- 諸説あり後述・武石兼相門下の松本伝の口伝では一伝斎重晨を開祖としている
- 小佐野淳『剣豪浅山一伝斎について』武道学研究19-2, 1986年, P103-104
- 小佐野淳 (1986年)『剣豪浅山一伝斎について』武道学研究P104
- 綿谷雪, 山田忠史 編 (1969年)『武芸流派大事典』新人物往来社 P547
- 綿谷雪, 山田忠史 編 (1969年)『武芸流派大事典』新人物往来社 P122
- 綿谷雪, 山田忠史 編 (1969年)『武芸流派大事典』新人物往来社 P222
- 為我流目録□免許 秘術虎の巻 明治40.5.15 谷田部清之助 参考史料4 ご参照
- 小佐野淳 (1990年)『武術・浅山一伝流』愛隆堂P18~27
- 藤田西湖所蔵・大倉直行「源知徳」(江戸期カ)『浅山一伝流體術』P1 原文は「其起原慶長之頃渡来漢人拏拳法学士成功之後其技取捨而配角觔又創成拳道術和術名付後伝今世柔術也」である。
- 真言宗大覚寺派岩瀧寺のHPによる (歴史・岩瀧寺・(ganryuzi.jp))
- 松本伝兼相流柔術と浅山一伝流柔術の技名比較による。参考史料6 をご参照
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 P77 (巻末) 参考史料1 ご参照
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 P41
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 P53
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 表紙右側 参考史料1 ご参照
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部

部資料裏表紙、参考史料1 ご参照

- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 P40
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 P40
- 那珂町史編さん委員会 編 (1995年)『那珂町史 近代・現代編』那珂町 P306~307 「(前略) 杖術は佐和村と三反田村から分派されたのが主流を占めているが (後略)」
- 勝田市史編さん委員会 編 (1979年)『勝田市史 近代・現代編1』勝田市 P970
- 松本貢兼久 (1988年)『武石兼相先生の想い出』松道流松栄館所蔵 P8
- 現宗家が受けた口伝では読み書きができない方で、本業は鋳掛屋だった。また松本師壮年期の弟子である正木師の口伝では印刷場の裏に住む、年召した方、とある。
- 那珂町史編さん委員会 編 (1990年)『那珂町史 中世・近世編』那珂町 P511~512 「(前略) 祖は佐々木哲斎徳久である (中略) 戦いに敗れたのち漂泊し、無住所行人徳伝法印歳久と号した (後略)」
- 『勝田市史編さん史料 (18) 聞きがたり勝田の生活史Ⅲ』勝田市編さん委員会 P178
- 小佐野淳『武術・浅山一伝流』愛隆堂, P141
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 P48
- 清水謙一郎 (1953年)『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料 P57
- 文化財の時代区分について - 和の住まい設計 | 稲上建築設計事務所 (kazabito.com)
- 文の京デジタル文庫『地籍台帳・地籍地図〈東京〉(明治45年)』文京区立図書館
- 文京区アカデミー推進部アカデミー推進課文化資源担当室 (文京ふるさと歴史館) による

論文

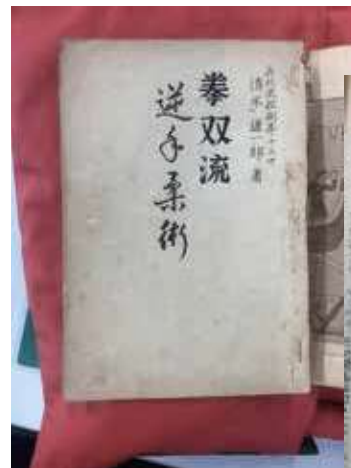
- 32 大日本消防協会（1906年）『大日本消防協會雜誌 第4年(4)(33)』, P44, 道場跡は現・東日暮里三丁目29 付近
- 33 清水謙一郎（1953年）『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部内部資料
- 34 松本貢兼久（1988年）『武石兼相先生の思い出』松道流内部資料 松道流本部所蔵
- 35 百貨店商報社, 1933年（昭和8）『日本百貨店総覧第1 卷（三越）』, P275
- 36 大草四郎右衛門『一伝流居合印可之巻』（参考史料『2. 一伝流の印可目録』ご参照）
- 37 宮本正尊（1964年）『道元の中道思想』印度學仏教學研究12巻1号
- 38 津田一左衛門教正から太田勇七へ（1851年）『浅山一伝流武者組目録』
- 39 妻木正麟（1991年）『詳解田宮流居合』スキージャーナル
- 40 小林勝法（2004年）『武道歌に見る居合術の理念と技術』文教大学国際学部紀要
- 41 上野義明, 日森定雄『日本伝神道天心古流拳法：拳聖上野貴第8 世宗家に捧ぐ』元就出版社, 1999年
- 42 臼井真琴 監修『大和道講座 佐藤金兵衛直伝』蓋世企画, 2003年
- 43『初見良昭武神館の秘法忍術教伝, 体術編』BAB ジャパン, 2018年
- 44 姉川勝義『実戦武術物語』壮神社, 1995年
- 45 佐藤金兵衛 著、裴錫榮 編訳『日本捕手術』上海徐汇区武術協会, 内部資料、参考史料5 ご参照

参考文献（順不同）

1. 為我流目録□免許 秘術虎の巻 明治40.5.15 谷田部清之助
2. 水野流目録 溝口源太兵衛
3. 浅山流柔術巻 明治16.3.23
4. 大倉直行「源知徳」（江戸期カ）『浅山一伝流體術』小田原市図書館所蔵
5. 浅山一伝流武者組小書 江戸期 谷口直富
6. 浅山一伝流武者組目録 嘉永4.9.25 津田伝
7. 一伝流縄目録 江戸期カ 遠藤□太夫保胤 述
8. 水野一伝流剣術 明治3.12. 藤原勝吉
9. 一伝流武者組目録 元文6.2. 待田文蔵克光
10. 竹内一伝流杖半棒免許状 福井謙吾
11. 一伝流縄免許状并目録 野間次郎助
12. 一伝流居合目録 大草四郎右衛門
13. 一伝流居相 大草四郎右衛門
14. 一伝流縄目録 渡辺平蔵
15. 一伝流居合印可之巻 大草四郎右衛門
16. 吉岡一流取手五輪巻 橋木曾右衛門
17. 不伝流居相口伝書 江戸期カ
18. 浅野藤四郎良真より高野政兵衛へ（年不詳）『浅山一伝流體術目録』国書データベース
19. 井原兵之丞勝吉より庄田雪次郎へ（1869年）『水野一伝流剣術初伝』国書データベース
20. 井原兵之丞勝吉より宛先不明（1869年）『一伝流剣術目録』国書データベース
21. 長谷川守太より原田繁右清へ（1864年）『柔術四国一伝流免許状』天理大学附属天理図書館所蔵
22. 高橋重蔵守知より原田弥平へ（1851年）『浅山一伝流腰廻極意』天理大学附属天理図書館所蔵
23. 『浅山一伝流心学』天理大学附属天理図書館所蔵
24. 『太刀筋口伝』天理大学附属天理図書館所蔵
25. 『四国一伝流柔目録』天理大学附属天理図書館所蔵
26. 『四国一伝流棒術目録』天理大学附属天理図書館所蔵
27. 村上晋（1921年）『大正武道家名鑑』平安考古会
28. 綿谷雪（1962年）『日本武芸小伝』人物往来社
29. 綿谷雪, 山田忠史 編（1969年）『武芸流派大事典』新人物往来社
30. 綿谷雪（1969年）『古武道文献集（稀本叢刊）』武芸帖社
31. 小佐野淳（1990年）『武術・浅山一伝流』愛隆堂
32. 中村民雄（1984年）『民和スポーツ文庫蔵書目録』民和スポーツ文庫
33. 中村民雄（1997年）『民和文庫蔵書目録』日本体育大学
34. みとの魅力発信課（2017年）『ミトノート』第5 号水戸市
35. 小野崎紀男（2018年）『水戸藩の武術』有限会社ツーワンライフ
36. 石島尚雄（1999年）『道元禪と雲門宗に関する一考察』印度學仏教研究第4 8 巻第1 号
37. 杉江正（1979年）『近代武道の成立過程に関する研究』武道学研究11 巻3号P12～22
38. 小佐野淳（1986年）『剣豪浅山一伝斎について』武道学研究19 巻2号P103～104
39. 荒木英之、黒木俊弘、小林正憲、大坪寿（1987年）『久留米剣術流儀「津田一伝流」について』P15～16
40. 浅見高明（2000年）『武道における活法の効用』人体科学9巻1号P43～56

参考史料

1. 清水謙一郎（1953 年）『拳双流逆手柔術』日東武術研究会本部
内部資料日本体育大学図書館所蔵より：

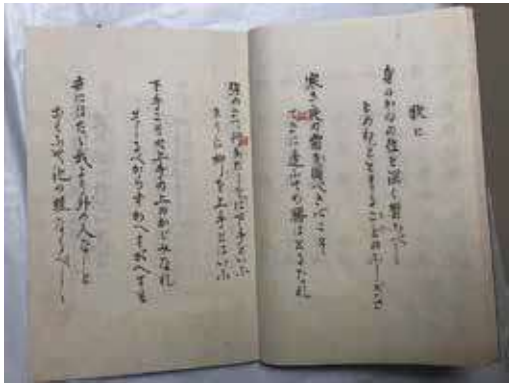


2. 一伝流の印可目録

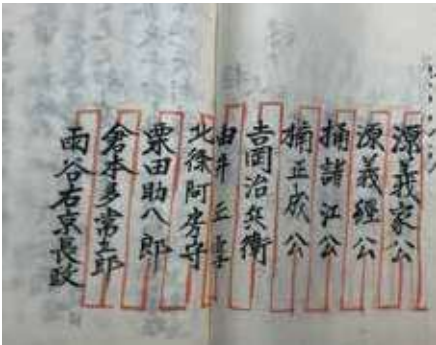


論文

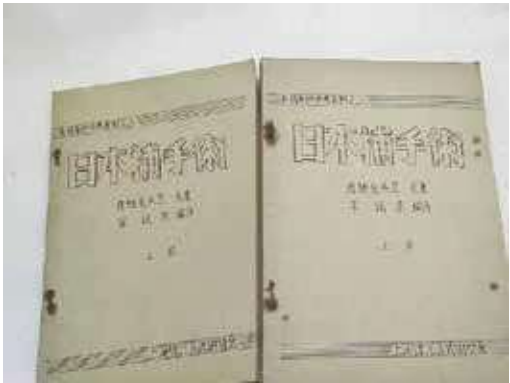
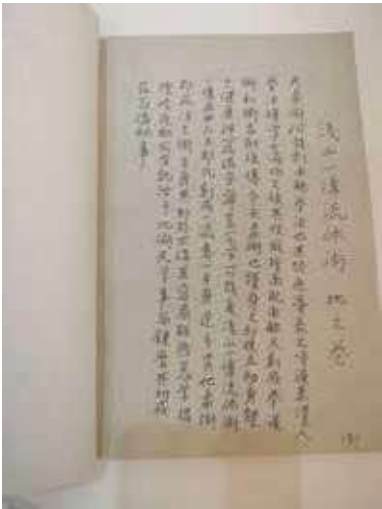
3. 浅山一伝流武者組目録



4. 為我流伝書虎の巻



5. 日本捕手術



6. 松本伝兼相流柔術（松道流本部所蔵）と東京伝浅山一伝流體術（小田原市図書館所蔵）

